

介護の合間 安らぎのとき

ヘルパーのためのコンサート
京で開催



ヘルパーのために開かれたコンサートで、観客席から登場して大きな拍手で迎えられたバイオリニストの田久保さん
(京都市左京区、ロームシアター京都)

反響大きく 恒例行事に育てたい

介護保険サービスの在宅介護で中心的役割を担う訪問介護員(ヘルパー)に、安らぎのひとときを過ごしてほしい。京都市内でヘルパー約1400人を雇用する京都福祉サービス協会(下京区)が5月、ヘルパーのためのコンサートを京都市内で開いた。利用者として深く向き合う仕事だけに喜怒哀楽の感情を真正面から受け止めることが多い一方で、同僚と顔を合わせて話す機会が少ないヘルパーたちに、心地よい音楽で気分転換してもらおうとの狙いだ。計4回の公演に約1400人が来場し、バイオリンとピアノの音色に聞き入った。

開場前のホールに約100人が列をつくった。午前中だけ休みを取って駆けつけた人も多い。冒頭30分ほど「全体ヘルパー会議」として事業計画の説明などを行った後、バイオリニスト田久保友妃さんとピアノスト牲川句哉さんが演奏した。

イベントに育てていければ」と企画した協会居宅本部事業部の藤本敏朗事業運営アドバイザー。同協会が雇用するヘルパーの約7割は非常勤で、自宅から利用者宅に直行直帰する日がほとんどだ。同僚と顔を合わせる機会も少なく、孤独になりがちで、「ヘルパーさんが前向きな気持ちになれる時間をつくりたかった」(藤本さん)。メッセージも紹介することで、皆がさまざまな思いを抱えていることも知ってもらえれば、という。

コンサート後、右京区で活動する西田まゆ美さん(68)と河原智子さん(64)は「もうちょっと聴きたかった。利用者さんを通して人生を学ばせてもらっている」というこの仕事の醍醐味を思い出しました」と語った。

今年ヘルパー有志86人がコーラスグループを結成、田久保さんたちの演奏の後に初舞台を踏んだ。メンバーの高倉明美さん(48)が「緊張したけれど気持ちよかった」と笑顔を見せ、「豊かな時間を過ごせた。穏やかな気持ちで頑張れます」と午後からの仕事に向かった。

同協会のヘルパーは平均年齢が61歳と全国的に見ても高く、高齢化も課題だ。「コーラスやコンサートが福利厚生の一環として定着し、若い方たちにも魅力的な職場になれば」と藤本さんは話す。

(大田敦子)